

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション	研究科	異文化コミュニケーション 専攻
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・博士後期課程 1年	荻原 まき 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・教授	小山 亘 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	『『言語』と『記憶』のアイデンティティ：台湾原住民族の語りの『今ここ/過去』から』		
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程 1年	荻原 まき	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 192,675 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

博士前期課程において、実際に台湾原住民族にインタビューし、分析を試みた。3人の研究協力者の談話の分析を行ったが、その結果、語りの中で「今ここ」と「過去」が重なり合っていることがわかり、1945年の日本降伏という社会的出来事が彼ら原住民族にとって大きな変化であったことが窺え、それは「今ここ」の現在にも繋がっていることが明らかとなった。それは談話分析というミクロな視点と、歴史的・民族的・言語的背景を絡めたマクロな視点の両方向からの分析により窺えたものであったが、3人の中の1人により焦点を当て、より詳しく、深く分析を試みた。「今ここ」と「過去」の重なりの中に現れるアイデンティティの揺らぎを考察したいと考える。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[台湾原住民族] [日本語] [語り]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2014年度は、前期課程で行った研究を元に、①前期課程での論文、データの見直し、②Aへのインタビュー、③学会発表、論集寄稿、の3点をあげた。以下これらの取り組みの報告を行う。

まず①については、データをもう一度見直すことができ、収集した当時では気付かなかった箇所分析が行えた。例えば、台湾原住民族の人生の転機として、日本降伏という大きな社会的出来事があったが、それだけではなく、原住民族一人一人の個人的背景が複雑に絡み合い、「今ここ」に繋がっているということであった。その中の一つがキリスト教入信である。修士論文でも多少触れたが、収集したデータをよく見直してみると、インタビューを行った原住民族のそのほとんどがキリスト教に入信しており、深い信仰を持っていることがわかった。そして台湾原住民族とキリスト教の関係を研究した論文、文献等が非常に少ないことも明らかになった。2014年5月に行われた「日本台湾学会」における学会発表でもそのような現状であることがわかり、これからまだ深めていかなければならない研究ということがわかった。しかし論文、文献等はいまだ全て分析、理解できていない状態であるため、これからもデータの分析、論文・文献の講読を続ける。

次に②であるが、①でもあげた原住民族とキリスト教の関係を調べるため台湾へ赴き、2014年12月27日に修士論文であげた原住民族Aにインタビューを行い自宅に伺った。その際、原住民族とキリスト教との関係を中心にインタビューを試みた。その際のデータはまだ分析中ではあるが、キリスト教入信時について話を聞くことができた。例えば、原住民族には各部族の宗教があり、昔からそれに従って事を行っていたのだが、キリスト教は部族の宗教と比べ、非常に自由でなんでも受け入れてくれるいい宗教だとし、当時の原住民族が集団で入信したという語りがあった。これは「福音爆発」と呼ばれ、非常に稀なことであったという。このキリスト教入信が少なからず「今ここ」の彼らのアイデンティティを形成していることは間違いのないと思われる。そして彼らの語りはこのキリスト教という信仰が基軸となっているということも考えられ、もう少しこのキリスト教との関係を深く考察する必要があると考える。加えて、12月25日には桃園縣復興郷の泰雅族のある原住民D(初めてお会いする)へのインタビューが可能になり、Dにお話を聞くことができた。Dは91歳で、原住民族として唯一、陸軍幹部候補生学校に入学した方であった。Dの語りも現在分析中だが、日本の候補生学校において訓練(空軍)を受けたDの語りは、今までインタビューを行った原住民族の語りとは違った視点からの語りであった。Dは戦地へ行く直前に終戦になったのだが、日本人の近くにいたDは、この戦争が負ける、ということを知っており、語りにそれが現れていたのが印象的であった。またDとその奥さまは普段から日本語で話しており、当時の日本語をそのまま使用していることが垣間見られ、奥さまへのインタビュー、また二人の日本語での会話分析も可能であると思われた。今回は初めてだったため、様子を見る程度であったが、今後も引き続きインタビューができそうなことから、また第2回目のインタビューを試みたいと考えている。

最後に③の学会発表、論集寄稿であるが、学会発表としては、9月の社会言語科学会において口頭発表を行った。結果、分析が甘い箇所の指摘、論が若干飛躍しているのではという指摘等あり、先生方から貴重なご意見を頂くことができた。この社会言語科学会では、同年3月に行った口頭発表の大会発表賞の授賞式が行われ、賞状をいただくことができた。この賞を機に、研究を深めていく所存である。また、12月には初めて台湾関係の研究会で口頭発表を行った。40分ほどの口頭発表であり、聞いてくださった方の2/3が台湾人である環境での発表であった。原住民族のBの談話を使用し、短い談話の中でも揺れ動くアイデンティティについて考察を行った。その結果、聴衆である台湾人の方々から、この研究の必要性を言われ、非常に励みになった口頭発表であった。この研究会には定期的に参加し、台湾人の方からの直接のご意見をいただきたい。

研究成果の概要 つづき

論集寄稿は、桜井厚氏の『ライフストーリー論』の書評一つのみであったが、論文でも引用し、分析にも活用している研究方法であるため、今後の研究の参考となるであろう。「語り」という言語実践において、この「ライフストーリー」という研究法は私の研究にも非常に深く関わっているため、この分野の研究も引き続き学んで行きたい。

来年度は、学会・研究会発表に関しては、異文化コミュニケーション学会、多言語社会研究会等での口頭発表の依頼がされていることから、最低二か所での発表を試みる。論文投稿に関しては、社会言語科学会で発表したものをまとめたものの論文投稿、また異文化コミュニケーション論集への寄稿も考え、最低 1 本の投稿を行う。

その他、12 月 24 日に国立東華大学、簡月真准教授（台湾原住民の言語の研究者）に面会に行った。1 時間ほどであったが、今後の原住民研究についての話、台湾における個人情報取扱についての話等を聞くことができ、有意義な時間を過ごすことができた。

以上

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① なし

② なし

③ なし

④

【学会発表】

2014年9月13日(土) 社会言語科学会 (JASS) 第34会大会 口頭発表

【研究会発表】

2014年12月14日(土) 中国語文學會第147回定例学術研究発表会 口頭発表

【書評】

桜井厚「ライフストーリー論」2015年3月刊行 異文化コミュニケーション論集